

「ミドルマーチ」序論

山 本 和 平

序章 主題について

『ミドルマーチ』（一八七一—二）は全八巻八六章に序と結語をもつ長篇である。本論はその成立過程は一応問題外とし、現作品をひとつの統一的全体として論ずることにする。⁽¹⁾

およそ文学作品を論ずるにあたって「読後の印象」ほどたよりにならないものはない。なぜなら「印象」は時と共に変化し、固定した明確な対象としてとどまりえないからである。しかし「印象」をぬきにしては批評の成立する基礎がなくなることもまた事実である。この意味で「印象」に支えられない一切の「論」は虚妄にすぎない。およそ作品論の展開をみちびき窮極的にその統一を支えるのは、良くも悪くもこの「印象」をおいてないからである。⁽²⁾

さて、『ミドルマーチ』全体のうちで最も印象的な場面はどこであろうか。おそらくこういう設問には疑問がある。なぜなら作品の印象（あるいは感銘）は個々の情景やエピソードではなく、それらの全体の印象だからである。

『ミドルマーチ』は、ヴィクトリア朝随一の知的作家といわれるジョージ・エリオットの多様な関心——さまざま

なタイプの結婚の様式とその倫理、恋愛の心理、学問や科学と生活の関係、芸術と実生活、幻想と真実、宗教と偽善、殉教、遺産相続、金銭と愛、鉄道新設、選挙法改正……—これら一切を包含する関心の所産であるから、読後の印象は特定のある情景ではなく作品の全体にかかわるものであろう。そしてそれらを統一するものとして表題の「ミドルマーチ」があると考えると、はたして叙上の関心が「ミドルマーチ」として統一されているかということが、読後印象に照らして検討されねばならないであらう。

表題のミドルマーチとはイギリス中部の地方都市（コヴェントリーがそのモデルといわれる）の名であり、これには副題「ある地方生活の研究」が附せられていて、事実、叙上の関心事がミドルマーチ及びその周辺のいくつかのバリッシェを舞台にさまざまな階層の人々の上に展開されている。

したがって、『ミドルマーチ——ある地方生活の研究』を題目にした時、ジョージ・エリオットの意図がミドルマーチという町を主人公とする小説にあったとみてよいであらう。さらに、たとえば十一章（ここで『ミドルマーチ』を構成する二つの物語、カソーボン・ドロシア主題とリドゲイト・ヒロザモンド主題のうち、後者のリドゲイトがはじめて登場する）で、人間関係を微妙にあやつる「運命」は当事者たちの意識とは別のところで働いているといい、「Old provincial society had its share of this subtle movement」だとしてその「社会」の「微妙な運動」のさかやかなタイプの例をあげているが、その中のたとえば「less marked vicissitudes', 'altering with the double change of self and beholder」とか「much the same sort of movement and mixture」とかいう表現からうかがわれるようにジョージ・エリオットには、事物の変化、歴史の運動という意識（少なくとも観念）が存したことも疑いない。

しかも小説の中でしばしば一八三二年の選挙法改正のための政治運動への言及があるところからみて、『ミドルマーチ』は、一八三二年に至る数年間のイングランドのある地方都市の「社会」の動きを意図してたとみてさしつかえないであろう。

しかし、はたして読者の読後印象として特定の一時代の地方社会ミドルマーチが鮮明な姿をもって感銘されたか、すなわち作者の叙上の意図が実現されたかとなると問題はまた別といわざるを得ない。⁽³⁾

第一巻「ブルック嬢」の第十章の途中まで、すなわち、作者がブルック氏に晩餐会を開催させて、この作品の主要人物たちを紹介し、十一章でリドゲイトの詳細な説明をはじめのまでは、物語はほとんどオースチンの、ドロシア・ブルックのカソーボンへの「幻想」が辿られている。この部分はしばらく措くとして、ミドルマーチなる町が主人公として充分な感銘を与えてくれないというのが真実であろう。

一 地方都市ミドルマーチが主人公として感銘されるには、それがひとつの有機体として、そのいわば生活過程として展開されねばならない。すなわち 'subtle' ではあっても 'movement' としてとらえられねばならない。物語の発端におけるミドルマーチがその物語の展開たる生活過程を通して、その末尾においては変革されたイメージとして迫ってこなければならぬ。「時」の経過はそうした変化のなかで始めて知覚されるのである。

このような意味での変革が体験されなかったとすれば、ミドルマーチは生きものとして、有機的統一体として把握されていなかったことになるであろう。ミドルマーチそれ自体にはなにも生じなかったという素朴な印象はこれを主張するのである。

これに関連してもうひとつ素朴な疑問を提出しよう。なぜ『ミドルマーチ』の時間は、ドロシアの結婚に至る経緯（カソーボンとの出会い）にはじまり、彼女の再婚に終らねばならないのか、ドロシアの経験する時間は、はたしてミドルマーチの世界の展開における時期的必然性と結びついているのか、という疑問である。

ドロシアの結婚から再婚までの時間的枠の中で、ドロシアの物語以外に、たとえばリドゲイトとロザモンドの不幸な結婚、銀行家バルストロード氏の偽善の曝露をはじめ、大小さまざまな事件が起る。しかしそれらがミドルマーチという「主人公」の生活過程の展開の、ひとつの具体的表現として、ミドルマーチのいわば本質といったものを表現すべく描出されているかは極めて疑わしい。

地方都市ミドルマーチの本質は基本的には、たとえばフローベルの『マダム・ボヴァリ』におけるが如く、ドロシアやリドゲイトをミドルマーチと対立せしめることによって曝露されるであろう。そしてドロシアやリドゲイトの精神の偉大さは、ミドルマーチの「社会」との葛藤が困難であればあるだけ偉大になるであろう。精神がそのみみっちいエゴイズムの牢獄「私性」を脱してバブリックなものへと高まりうるのは、そうしたエゴイズムを本質とするミドルマーチという「社会」と抗争する以外にはないわけである。

ところが、ドロシアもリドゲイトも叙上のエゴイズム脱却の契機を充分に具えてはいるけれど、ほとんどミドルマーチそのものとの抗争にまきこまれることはなく、ミドルマーチの外で孤独にその劇を展開しているといってよい。ミドルマーチはドロシアを中心とする個人的な、倫理的な人間関係の劇から疎外されたいわば書き割りとして、彼らが空しい騒音をたてて去ったあと、劇の発端と交わらず白々しく残るのである。

こうした印象は巻末の「フィナーレ」によって一層強化される。ここで作者は物語の緊迫した劇的時間との断絶をはかる。

'Every limit is a beginning as well as an ending. Who can quit young lives after being long in company with them, and not desire to know what befell them in their after-years? For the fragment of a life, however typical, is not the sample of an even web: promises may not be kept, and an ardent outset may be followed by declension; latent powers may find their long-awaited opportunity; a past error may urge a grand retrieval.

このように一般的な叙述に支援されて、以下物語中の三組の若い夫婦たちの後日譚が語られる。ここに「劇的時間」と「日常的時間」との断絶は明瞭であるが、はたして作者が当然視しているようにすべての読者が後日譚を要求するかは疑問であらう。

いずれにせよ日常的時間のロング・ショットのなかで、かつての(?)劇中人物たちが忽ち色褪せていくという印象は蔽いがたいのである。それと共に、彼らの「劇」が一時の迷妄にすぎなかったのではあるまいかという想念に襲われるのである。すなわち、彼らの「劇」は一時期の悪夢の所産にすぎなかったのではないか、しかも、ドロシアのカソーボンとの出会いにはじまりウィルとの再婚に終る物語の時間的枠内で、すべての登場人物が(奇怪にも)まっ

たく時を同じくして悪夢に陥っていたのか、という印象、したがって「フィナーレ」のなかの彼らはさながら狐が、おちたという印象をまぬかれないのである。

では何故こうした結果になったのであろうか。余りにイギリス的な、「秩序」への復帰という良識が作用したのか。あるいは、ジョージ・エリオットの悪しきリアリズム観の所産であらうか。いずれもほんとうであらう。

しかしいかに弁解してみたところで、作中第一の人物たるドロシアが、ミドルマーチの中で生きのびてしまったことは致命的である。ドロシアはそれがたとえ迷妄イリュージョンにすぎぬとはいえその迷妄と共に生死するとき劇的人物としてのリアリティを獲得しえ、と同時に、ミドルマーチのリアリティは浮き彫りにされたはずである。

むろんドロシア的人物、「後代のテレーザ」は統計的には、現実世界では、死なないであらう。しかし文学的には彼女の狂気か自殺によってしかミドルマーチのリアリティは、したがってドロシアのリアリティは獲得されないのではないか。悪しきリアリズム、悪しき実証主義への屈伏がかえって文学的リアリティを奪うことになったのではないか。

かくてドロシアの「テレーザ的熱情」は一挙に「幻想」ないし「空想」に転化し色褪せる。ドロシアを中心とする劇は、白々しい空騒ぎの印象を残して終る。

そこで、『ミドルマーチ』の世界を、一地方都市ミドルマーチを主人公とする物語という観点から眺めることをやめよう。そして作者の意図にかかわりなく、実現された結果から判断して、副題の「ある地方生活の研究」を「あ

る地方生活における人間関係の研究」と書き改め、『ミドルマーチ』をその研究対象でも、又研究対象の培養基でもなく、培養基のおかれたシャーレである（すなわち「空間的枠組み」にすぎない）とみればほとんど困難はなくなるであろう。（この「培養基」とは、エゴイズムと反エゴイズム（Fellowship）を対立的二大動因とする情動の諸形式を展開するのに最も効果的な人間関係を統御するものである。これについては後述。）

ところで一地方社会ミドルマーチそれ自体が、ある一定の歴史的運動法則の実現の過程として扱えられず、個々のほとんど偶然的な人間関係の算術的総和におきかえられているけれど、それら個々の人間関係が全く相互に孤立したものでなく、緊密に入り組んだ関係として、しかも圧倒的な印象を与えるものはなぜであろうか。

『ミドルマーチ』に登場する主要人物たちの系図をたどっていくと、そのことごとくが姻戚関係の糸で結ばれてしまふことを発見して驚くであろう。たとえば物語の末尾近くにあらわれてバルストロード氏を脅やかす悪党ジョン・ラッフルズが系図的にはドロシアの遠縁にあたることになっているのだ。

しかし、物語中の主要な人間関係——たとえば、カソーボン・ドロシア、リドゲイト・ロザモンド——の相互を結びつけるのは血縁ではない。又舞台の同一性でもない。

それは、それぞれの独立した関係の展開を支配する（と作者の考える）ある理念、あるいは個々の関係を展開する動因、の同質性なのである。

あるひとつの「人間」観によってすべての人間関係が、その一定の視角から把握され、強力に統御されているのである。

たとえばメアリ・ガースは作者の批判をまぬかれたほとんど唯一の登場人物であるが、このメアリとドロシアは共に反エゴイズムという美徳の点では共通であるが、一方メアリはドロシアのごとき幻想をもたない点でドロシアと区別される、といった倫理的側面での相補関係がそこにあつて両者を結合している。

またドロシアとリドゲイトはミドルマーチ的慣習の世界に反撥して理想を追求し、他者のエゴイズムに挫折する点では共通であるが、ドロシアの挫折は、「結婚」をその理想実現のための不可欠の媒介たらしめようという幻想に起因し、リドゲイトの挫折は「結婚」を「理想」の追求から区別しようという幻想に起因する。

このように『ミドルマーチ』における「人間」は、窮極的にはエゴイズムと反エゴイズムとを両極とする簡明な対立と、それらを内在的な本質とする「自己」を超えようとする「幻想」——それは積極面と否定面とをもつ——、これら三つの極めて倫理的な要因で構成されているとみてよいであろう。

『ミドルマーチ』は個々の人物描写や心理描写においては実に客観的な様相を呈しながら倫理的な視点から極めて主観的に統一された世界——極言すれば、叙上の人間観によって強引に構成された世界である。そして細部の豊饒さにもかかわらず、全体的にはある抽象性の印象をまぬかれないのも、窮極的には「社会」に媒介されない個人主義的人間観、倫理観に基づく人間関係の認識と設定によって、主観的にミドルマーチの「社会」を構成統一してしまつたところにある。

このように「社会」の表現にはリアリティを与えることができなかった、「社会」はせいぜいいくつかの人間関係の総和でしかなかったわけであるが、事実ジョージ・エリオットはこの小説の方法として個々の人間関係の劇を——

「社会の微妙な運動」そのものではなく——集中的に意図していたのではないか。第一章冒頭、フィールディングと近代小説家との小説の方法の差を論じて次のようにいつている。

‘We belated historians must not linger after his example; and if we did so, it is probable that our chat would be thin and eager, as if delivered from a camp-stool in a parrot-house. I at least have so much to do in *unraveling certain human lots, and seeing how they were woven and interwoven*, that all the light I can command must be concentrated on *this particular web*, and not dispersed over that tempting range of relevances called the universe.’ (Italics mine)

「運命」としての人間関係の構成する「蜘蛛の巣」を「解明」すること——これこそジョージ・エリオットの方法であると同時に、壮大な主題なのである。

以下本論では二つの典型的（と思われる）シチュエーションを抜き出して二つの側面から『ミドルマーチ』の主題と方法を分析してみよう。

(1) 成立過程に関する詳細な研究は Jerome Beatty: *Middlemarch from Notebook to Novel—A Study of George Eliot's Creative Method* (The University of Illinois Press, Urbana, 1960) を参照。

(2) 批評の基盤としての「印象」の意味については、たゞき Pery Lubbock: *The Craft of fiction* の冒頭を参照。

(c) F. R. Leavis は、*Social Charges* が見事に表現されているとみている。The Great Tradition. p. 61 を参照。
反対に Arnold Kettle は、*An Introduction to the English Novel* のなかで、これと反対の意見を出しているが、これに關する Kettle の分析は実にすばらしい。

第一章 情動の力学

主として『ミドルマーチ』の感銘をささえるのは、個々の情景、エピソードである。それは決して自然描写や優美な人間感情ではなく、ある室内での二人の人間（主として男と女）の危機的な緊張關係のなかにある。『ミドルマーチ』の展開の基軸にあるのはカソープ・ボンロッド・ロシア、リドゲイト・ロザモンド、フレッド・ヴィンシーとメアリ・ガス、そしてバルストロッド夫妻といった主として恋愛と結婚による人間關係であり、それらが、ある危機にたつたとき⁽¹⁾に情動や心理の軌跡として、ほとんど科学的嚴密さといってよいほどリアリスティックにかたられるときその感銘は圧倒的である。

まずその一例として第三章のリドゲイトとロザモンドの対面の場——リドゲイトが噂をおそれしばらくロザモンドから遠ざかっていたが用事にかこつけて訪問し、結局われしらず（？）婚約してしまう場面である。⁽²⁾

Text I

Miss Vinsey was alone, and blushed so deeply when Lydgate came in that he felt a corresponding

embarrassment, and instead of any playfulness, he began at once to speak of his reason for calling, and to beg her, almost formally, to deliver the message to her father. Rosamond, who at the first moment felt as if her happiness were returning, was keenly hurt by Lydgate's manner; her blush had departed, and she assented coldly, without adding an unnecessary word, some trivial chainwork which she had in her hands enabling her to avoid looking at Lydgate higher than his chin. In all failures, the beginning is certainly the half of the whole. After sitting two long moments while he moved his whip and could say nothing, Lydgate rose to go, and Rosamond, made nervous by her struggle between mortification and the wish not to betray it, dropped her chain as if startled, and rose too, mechanically. Lydgate instantaneously stooped to pick up the chain. When he rose he was very near to a lovely little face set on a fair long neck which he had been used to see turning about under the most perfect management of self-contented grace. But as he raised his eyes now he saw a certain helpless quivering which touched him quite newly, and made him look at Rosamond with a questioning flash. At this moment she was as natural as she had ever been when she was five years old: she felt that her tears had risen, and it was no use to try to do anything else than let them stay like water on a blue flower or let them fall over her cheeks, even as they would.

That moment of naturalness was the crystallizing feather-touch: it shook flirtation into love. Remem-

mber that the ambitious man who was looking at those Forget-me-nots under the water was very warm-hearted and rash. He did not know where the chain went; an idea had thrilled through the recesses within him which had a miraculous effect in raising the power of passionate love lying buried there in no sealed sepulchre, but under the lightest, easily pierced mould. His words were quite abrupt and awkward; but the tone made them sound like an ardent, appealing avowal.

“What is the matter? you are distressed. Tell me, pray.”

Rosamond had never been spoken to in such tones before. I am not sure that she knew what the words were: but she looked at Lydgate and the tears fell over her cheeks. There could have been no more complete answer than that silence, and Lydgate, forgetting everything else, completely mastered by the outrush of tenderness at the sudden belief that this sweet young creature depended on him for her joy, actually put his arms round her, folding her gently and protectingly—he was used to being gentle with the weak and suffering—and kissed each of the two large tears. This was a strange way of arriving at an understanding, but it was a short way. Rosamond was not angry, but she moved backward a little in timid happiness, and Lydgate could now sit near her and speak less incompletely. Rosamond had to make her little confession, and he poured out words of gratitude and tenderness with impulsive lavishment. In half an hour he left the house an engaged man, whose soul was not his own,

but the woman's to whom he had bound himself.

ここに恋愛の心理におけるある決定的瞬間が、その昂揚した情動と行動との相互作用の必然的な展開過程のなかで、いささか皮肉な調子をまじえながら、リアリスチックに見事に捉えられている。

このような心理的緊張の場面（それはほとんど倫理（当為）と情念との葛藤のシチュエーション）へと人物たちを追いかみ、その試練をくぐりぬける中で、彼らの本性を、のびきならない心理の軌跡として、曝露するときジョージ・エリオットの天才はきらめく。

“Miss Vincy was alone.”と、冒頭の一行は、それまでのロザモンドの心理的葛藤の重みと、その葛藤のはてに辛くも維持された無気味な危うい均衡とをになっている――

Happily Rosamond did not think of committing any desperate act: she plaited her fair hair as beautifully as usual, and kept herself proudly calm.

リドゲイトが登場した時の彼女は「傲然と平静を維持して」いるが、すでに全身、極度に過敏な「感受性」の荷電体と化し、「リドゲイトの態度」による刺激を待ち構えるもっぱら受動的な客体として存在している。

作者はロザモンドの神経の微妙な揺れを――よろこびから突然屈辱への反応の変化を――科学者のように正確に観

察し記録する——

Rosamond, who at the first moment felt as if her happiness were returning, was keenly hurt by Lydgate's manner; her blush had departed and she assented coldly, without adding an unnecessary word, some trivial chainwork which she had in her hands enabling her to avoid looking at Lydgate higher than his chin.

She assented……以下、裏切られた期待、傷つけられた自尊心は抵抗、反撃の色をおびる。そしてこの緊張は彼が立ち去ろうとするとき極点に達する——

Rosamond, made nervous by her struggle between mortification and the wish not to betray it, dropped her chain as if startled, and rose too, mechanically.

緊張下の情動が、身体的行動の自由を剝奪するまで極点に達した瞬間のメカニズムの精妙な観察。内面的葛藤（struggle）の性質の簡潔な分析。そしてその分析によるロザモンドの本性（susceptible pride ヲビめんぷり）の曝露。

こゝでロザモンドの外部にあらわれた行動——すなわち、読者の視聴覚に訴えるこゝとき行動——は、*“Rosamond dropped her chains and rose too, mechanically.”* のわずか八語で描写され、あとはその行動を惹起した内的情動の分析である。情動の圧倒的支配下におかれた危機的瞬間におけるパーソナリティの、情動の原因とその結果としての行動との——分析と描写との——緊密な統一的な表現がここにある。

このことはリドゲイトの側の反応においてもそのままではまる。

Lydgate, forgetting everything else, completely mastered by the outrush of tenderness at the sudden belief that this sweet young creature depended on him for her joy, actually put his arms round her, folding her gently and protectingly—he was used to being gentle with the weak and suffering—and kissed each of the two large tears.

リドゲイトの外部的行動は、*“Lydgate actually put his arms round her, folding her gently and protectingly, and kissed each of the two tears.”* であり、あとはその行動の動因たる心理の営みの分析（*“completely mastered ……”*）及び、彼の習慣となっている反応の型についての作者の注解（*“he was used to ……”*）である。こゝにも、圧倒的な情動の論理に支配される行動、内面と外面との緊密な相互関係が一挙に把握されている。

以上抽出した二つのパセジの構文上の奇妙な類似性は、それぞれ「情動」の「行動」への優位性によって貫かれて

いるといつてよい。「情動」が行爲者であつて主語はもっぱらその対象、客体におかれている。内的「葛藤」はロザモンドを nervous ならしめるし、「やさしさの湧出」はリドゲイトを完全に支配するのである。しかし「情動」の質は両者において相異し、その相異は本性の相異である。ロザモンドの情動は susceptible pride を、リドゲイトのは blind tenderness を基調としており、『ミドルマーチ』の二つの大きなストーリーのひとつ、理想にもえる医者と誇り高い美女の結婚の悲惨の歴史の動因はこうした両者の本性の対立相剋に窮極的にはあるのだ。

ジョージ・エリオットの倫理の理想は、自然流露の情動を基調とする fellowship にある。この場面における二人のばあい、ここで成立した「奇妙な理解のしあい方」には、この fellowship への希求が根本的に欠落している、それぞれ相手の emotional behaviours を自分流儀に解釈しあっている、要するに誤解にすぎない。

いづれにせよ、人間関係の理想的境地としての fellowship における「情動」の一義的重要性が、情動の層における人間の本质認識——人間の实体を、外面的行動のうちに過不足なく顕現されうる「性格」としてとらえるのではなくて、内面の危機的相としての「情動」の軌跡のなかに顕現されるものとみなす人間観——と微妙に絡みあつて、ジョージ・エリオット独特の小説の「方法」にも及んでいるといつてよいであらう。

行動の真的動因を内面の情動にみようとする人間観は、同時に、人間を變化の相下に把える——「性格」として行動発現のチャンネルを固定せずに、変貌する存在としてとらえる認識と結びついている。

..... he raised his eyes now he saw a certain helpless quivering which touched him quite newly ;

and made him look at Rosamond with a questioning flash. At this moment she was as natural as she had been when she was five years old: she felt that her tears had risen…… (Italics mine)

ロザモンドの、Struggle' によつて辛くも維持されていた精神の均衡はここで忽ち崩れ、誇り高き美女の仮面は一挙に剝奪される。ロザモンドの平常の姿としてすでに読者に与えられているイメージは——

Every nerve and muscle in Rosamond was adjusted to the consciousness that she was being looked at. She was by nature an actress of parts that entered into her *physique*: She even acted her own character, and so well, that she did not know it to be precisely her own. (一二章)

(ロザモンドの全神経、全筋肉は、人から見られているという意識にあわせて調節されていた。生来、自分の体格にびつたりした役を演技する女優なのであった。自分の性格ですら、しかもまことに見事に、演技したため、自分の性格なのかどうなのか正確には解らないほどであった。)

ここに叙べられたロザモンドの本質的な行動様式——自己意識性、演技性、人工性——がこの場面で払い落とされる。「意識」から「自然」へ、「女優」から「五歳の童女」への変貌。

情動的危機において相貌を変える存在としての「人間」認識は、リドゲイトの場合にもあてはまる。一五章の全体

を費やしてリドゲイトの経歴、性格、ミドルマーチにやって来た動機などが詳細に知らされている。すなわち、彼は「知的征服と社会的善の最も直接的な結合」(‘the most direct alliance between intellectual conquest and the social good’)を与えるものとして医者¹の職業をえらんだ男であり、²「専門研究の抽象性に抗する暖かい同胞意識をもったエモーションナルな男」(‘an emotional creature, with a flesh-and-blood sense of fellowship which withstood all the abstractions of special study’)であり、³又次のような欠点‘spots of commonness’をもっている——

.....that distinction of mind which belonged to his intellectual ardour, did not penetrate his feeling and judgment about furniture, or women, or the desirability of its being known (without his telling) that he was better born than other country surgeons.

(彼の知的情熱に属するあの精神の高貴さも、家具や女性やらにたいする自分の感情や判断、あるいは自分がどの田舎医者より生まれがいいのだということを(自分から言わずに)人にわかってもらいたいと願っている気持、などを看破できなかったのである。)

要するに専門的研究ではなく人事諸般にたいする感受性、判断力の未熟さが欠点として指摘されている。更に目下研究に専念すべく結婚の意志がない男であるとも紹介されている。又、作者は一般論で、若い知的情熱は恋の情熱とおなじように知らぬまに衰えていく危険を警告し、ひょっとしたら「女のながしめに胸をときめかせ」たために命取り

になるかもしれぬといっているのである。

リドゲイトの叙上の本質的な性向を蔽う理性的な自己抑制が解放されて、この瞬間本性が露呈される。作者は巧みな比喻を用いてこの隠されていた本性を、*‘the power of passionate love lying buried there in no sealed sepulchre, but under the lightest, easily pierced mould and形容’*。

こうした本性の曝露、自然への復帰としてあらわれる「変貌」をひきおこす「情動」の、「自己意識」「理性的抑制」「日常的慣習」にたいする優位性は、すでに言及したようにジョージ・エリオットの倫理の基調であって、これは、理想的な条件がそろったばかりには、おそらくあの宗教的回心の瞬間における情動——一切の虚構、理性的判断、自己主張を空無化し、魂に訴えて決定的な転換を迫る情動——と極めて類似したものとなるであろう。

ここでの情動の危機的相下において「回心」を迫る機能——*communion* をその契機として——は、ドロシアとウィル・ラジスロウとの対面の場合（たとえば三二章や八三章）、あるいはドロシアをいわば「司祭」とするロザモンドと彼女との対決の場合（八一章）において著しい。そもそもドロシアは、ジョージ・エリオットの理想的な倫理（人間関係）の探求者そして体现者としての役割りを担って登場しているが、彼女がカソーボンにたいして求めたのも、そしてウィルにおいて実現されたのも（たとい *ideal* ではあっても）この *communion* なのである。

例をあげよう。ウィルがローマから帰ってはじめてドロシアと会う場面である。

テキスト II

Each looked at the other as if they had been two flowers which had opened then and there. Do-
rothea for the moment forgot her husband's mysterious irritation against Will : it seemed fresh water
at her thirsty lips to speak without fear to the one person whom she had found receptive. (三十三頁)
(二人は顔を見あわせた、それはさながらいまここに開いた二輪の花といったふうであった。ドロシアは一
瞬、ウィルにたいする夫の不可解な焦立ちのことを忘れた。豊かな感受性の持主だと解っているたゞひとりの
人に気楽な気持で話しかけることは、彼女の渴いた唇をうるおす清水のように思われた。)

ドロシアをウィルにひきつけるのは、自分の内にあるものを理解してくれる彼の receptivity——communion の成
立する前提としての——なのである。

一方ウィルの方は、'unspeakable content in his soul of feeling that he was in presence of a creature to
be perfectly loved' (「純粹な愛をうけるに価する人の前にいるのだと感じて彼の魂はいうにいわれぬ満足」)を経験
する。そして更に作者が介入して次のように付け加える。

I think his own feelings at the moment were perfect, for we mortals have our divine moments,
when love is satisfied in the completeness of the beloved object.

(この瞬間の彼の感情は純粹であったと私は思う。われわれ人間は、最愛のひとの完全さのなかで愛が満たさ

れるとき、聖なる瞬間を経験するものだから。)

「純粹な愛をうけるに価する人の前にいるという感じ」すなわち「神聖なる瞬間」の経験というのは、ほとんど宗教的な communion に匹敵する。人間的次元での communion といつてよいであろう。さまざまの内面的葛藤のはてに八三章で二人を決定的な結合へとみちびいたモメントは、自然の嵐と並行し、それを象徴として展開される情動の嵐のなかでふたりが共通に経験するこうした communion の瞬間、「神聖なる瞬間」なのである。

むろん 'complete' とか 'perfect' とか最大級の空虚な形容詞の使用や、ほとんど素人芝居の大道具じみた嵐の場面の設定などは、ドロシアとウィルとの union がいわば「理念」としてとどまり、充分に realize されきれていない証明であろう。しかし実現の如何にかゝわらず、こうした情動の嵐のなかでの communion は、作者の理想的な倫理の基調なのである。すなわち、ジョージ・エリオットの、人物描写における情動の軌跡への集中的関心はおそらく、宗教的体験の人間的次元における再現、普遍化への要請——すなわち本来、神との靈的交渉である communion を、人間相互間に実現させようとする要求、真の人間関係を単なる convention や communication ではなく、 communion のなかに基礎づけようとするいわば主情的倫理観——と密接に結びついているといつてよいであろう。

こうした情動の積極的な価値づけも、小説としてリアリスチックな観察、反省的な分析の統御を欠くとき、ロマンチックな、理想的な情動の氾濫の観を呈し、説得性を失うであろう。積極的価値としての情動の自然流露は、このような人物描写における無批判な展開の危険を絶えず孕み、このドロシアとウィルの場面なども、観念的には理解しえ

でも、リドゲイトとロザモンドの場面ほど説得的ではない。

たとえば二人の対面する姿を「二輪の花」とするこの比喻の空々しさ。(同じ「花」でもテキストⅠのロザモンドの濡れた眼を「露をおびた忘れな草」の比喻で形容したが、これの方が説得的だ。forget-me-nots は、ついでにいうと、エゴイストたるロザモンドを形容するものとして実に利いている。) 比喻のすべてがいけないのではなく、二人を理想化しすぎるあまりの「花」の比喻があまりに安易、内容空疎だというのである。

むしろ、ドロシアの simplicity, 無技巧性、素朴さ(ロザモンドの sophisticatedness, 演技性に対立し、spontaneity に通ずるもの)を指摘して「Will, mysteriously forced to be just as simple as she was」とあるから、ドロシアに本質的に具わっている神秘的な力(魂の高貴さ)の作用が、反抗的性格の彼に働きかけて彼もまた「花」のごとき「素朴さ」にまで高められたということなのであろう。しかしこれは理窟である。それが証拠に、作者が介入して「この瞬間の彼の感情は……」と説明し、「そもそもわれわれ人間は……」と一般化することによって、これを正当化しなければならないのだ。

さて、情動の回心的機能の最も模範的な表現は八一章のドロシア、ロザモンドの対決の場におけるドロシアを司祭とするロザモンドの体験であろう。

テキスト III

“It was a newer crisis in Rosamond's experience than even Dorothea could imagine: she was under

the first great shock that had shattered her dream-world in which she had been easily confident of herself and critical of others; and this strange unexpected manifestation of feeling in a woman whom she had approached with a shrinking aversion and dread, as one who must necessarily have a jealous hatred towards her, made her soul totter all the more with a sense that she had been walking in an unknown world which had just broken in upon her.

(それはドロシアですら想像できなかったような、ロザモンドの経験における新たな危機であつた。ロザモンドは今や、安易に自己を信じ他人を批判していた自己の空想の世界を粉碎しつくした最初の大きなショックを経験していた。当然自分に嫉妬のまじった嫌悪を抱いているにちがいない人として、反感と恐怖とをもつておずおず近づいたひとりの女のこんな予想外の不可思議な感情の披露にぶつかり、自分にはたった今突然見えてきた未知の世界をこの女はずっと歩きつづけてきたのだと気づくと、それだけにまた彼女の魂はおろめくのであつた。)

そしてこれを要約して――

Rosamond had delivered her soul under impulses which she had not known before. She had begun her confession under the subduing influence of Dorothea's emotion.

(ロザモンドはいままで経験したことのない衝動に自分の魂をゆだねていた。ドロシアの情動の圧倒的な力に動かされて告白をし始めていた。)

もはやこゝで、‘feeling’, ‘emotion’, ‘impulses’ とよばれるものの機能について、事あらためて説明する必要はあ
るまい。ロザモンドの経験した ‘crisis’, ‘the first great shock’ は、彼女の ‘pride’ の幻想させた ‘dream-world’
の崩壊であり、この ‘confession’ は、テキストのリドゲイトを前にした場合と異なり自発的なものであった。

以上ジョージ・エリオットにおける「情動」の意義に関して、人間の本質的認識及び人間相互の真の理解は、情動
の層にまで下降することによってはじめて可能であるというエリオットの人間観、倫理観、およびその宗教的 com-
munion との関連について指摘した。

この情動はしかし、情動一般ではなく、各パーソナリティに応じた個性的な型（反応形式）をもつこと、たとえば
ロザモンドには susceptible pride とでも呼ぶべき、またリドゲイトには blind tenderness とでも呼ぶべき独自の
情動の型があることを忘れてはならない。そして、この情動に型を与えるパーソナリティ（逆にいうと、もろもろの
反応形式の統合としてのパーソナリティ）は、窮極的には、ジョージ・エリオットの人間把握の根本原理であるエゴ
イズムとアルトルイズムに帰着整序される。そしてすべての人間は、いかゞ決定的に、この両者のいずれかに分属
せしめられ、それはほとんど全く相互転化する契機を見出しえない固有のものと想定されていたと考えられるふしが

ある。『ミドルマーチ』の全人物中、エゴイストからアルトルイストへの発展をとげたのは——といっても、その展開が集中的に辿られていないため充分説得的とはいえないが——フレッド・ヴィンシーたゞひとりである。代表的なエゴイストたち、カソーボンも、フェザストンも、バルストロード氏も、そしてあのロザモンドですら遂にエゴイストたることをやめはしなかったのである。「フィナーレ」で説明されている二人の關係を見給え。‘She simply continued to be mild in her temper, inflexible in her judgment, disposed to admonish her husband, and able to frustrate him by stratagem.’

再びテキストにもどる。

ドロシアとロザモンドの間に成立するかにみえた communion を通じてのロザモンドの「回心」も、彼女の本性を根本的に変革するには至らなかったとすれば、テキストのロザモンドの「五歳の童女」への変貌も一時的なものにすぎなかったのである。

彼女の涙も決して魂を切りかえる浄化の涙ではなく、その本性たるエゴイズムの打撃ゆえの屈辱の涙でしかなく、それを彼の未熟な「感受性」「判断力」が恋の涙と錯覚したにすぎなかったのである。

次の一文から注意深い読者なら、二人のこの恋愛感情の昂揚にひそむある欺瞞——あるいは誤解——を容易に読みとるであろう。‘Rosamond had to make her little confessions, and he poured out words of gratitude and tenderness with impulsive lavishment.’ ここにはほとんど決定論的な人間観——どう変革しようもない人間の本性

——といったものがぞいている。ここには communion は成立しないし、またともにその必要もそれを感じ取る力もない、いわば完全な誤解と自己満足が、そして完全な孤独に至る危機にあるはずである。リドゲイトの『ミドルマーチ』における敗北は野心的な研究者兼ヒューマニスティックな医者として周囲のミドルマーチ的生活方式、慣習に屈したというよりも基本的には彼の結婚に、妻の本性を見抜きえなかった感受性や判断力の未熟さという個人的原因にあるのだ。

彼もロザモンド同様、自己の情動の形式の撰んだ決定的モメントをいわば「宿命」として最後まで生きぬく外はない——認識力の未熟さの罰として。(女性作家ジョージ・エリオットの鈍感な男にたいするおそるべき断罪?)

Lydgate had accepted his narrowed lot with sad resignation. He had chosen this fragile creature, and had taken the burthen of her life upon his arms. He must walk as he could, carrying that burthen pitifully. (八一章)

(1) 「情動」という語は日常語として熟していないが、'emotion' の訳語として用いる。'motion' を特にあらわしたためである。心理学では常用されている。

(2) 原文のみ掲げる。日本語訳は巻末に添えておいた。

第二章 心理分析

ドロシアとカソーボンとの葛藤はすでに新婚旅行の計画に際してシーリアを帯同したかどうかとのカソーボンの無神経な提案でドロシアが傷ついた時から始まる。四八章でカソーボンが急死するまでに、二人の葛藤が衝突という形で外化される場面は四回ある。

1、二〇章、新婚旅行中に、ドロシアがカソーボンに仕事の援助を申し出たことを契機に。

2、二九章、ウイルの訪問したいという手紙をめぐって。

3、三七章、ウイルに財産を分与すべきだというドロシアの提案を契機に。

4、四二章、死期を自覚したカソーボンがドロシアとウイルとの今後を想像し邪推と嫉妬から。（この四回目の衝突は陰にこもった懐さ。）

次の長い引用は第一回の衝突の一部である。

テキスト IV

“And all your notes,” said Dorothea, whose heart had already burned within her on this subject, so that now she could not help speaking with her tongue. “All those rows of volumes—will you not now do what you used to speak of?—will you not make up your mind what part of them you will use, and begin to write the book which will make your vast knowledge useful to the world? I will write to your dictation, or I will copy and extract what you tell me: I can be of no other

use." Dorothea, in a most unaccountable, darkly feminine manner, ended with a slight sob and eyes full of tears.

The excessive feeling manifested would alone have been highly disturbing to Mr. Casaubon, but there were other reasons why Dorothea's words were among the most cutting and irritating to him that she could have been impelled to use. She was as blind to his inward troubles as he to hers: she had not yet learned those hidden conflicts in her husband which claim our pity. She had not yet listened patiently to his heartbeats, but only felt that her own was beating violently. In Mr. Casaubon's ear, Dorothea's voice gave loud emphatic iteration to those muffled suggestions of consciousness which it was possible to explain as mere fancy, the illusion of exaggerated sensitiveness: always when such suggestions are unmistakably repeated from without, they are resisted as cruel and unjust. We are angered even by the full acceptance of our humiliating confessions—how much more by hearing in hard distinct syllables from the lips of a near observer, those confused murmurs which we try to call morbid, and strive against as if they were the oncoming of numbness! And this cruel outward accuser was there in the shape of a wife—nay, of a young bride, who, instead of observing his abundant pen-scratches and amplitude of paper with the uncritical awe of an elegant-minded canary-bird, seemed to present herself as a spy watching everything with a malign power of inference.

Here, towards this particular point of the compass, Mr. Casaubon had a sensitiveness to match Dorothea's, and an equal quickness to imagine more than the fact. He had formerly observed with approbation her capacity for worshipping the right object: he now foresaw with sudden terror that this capacity might be replaced by presumption, this worship by the most exasperating of all criticism, —that which sees vaguely a great many fine ends, and has not the least notion what it costs to reach them.

For the first time since Dorothea had known him, Mr. Casaubon's face had a quick angry flush upon it.

"My love," he said, with irritation reined in by propriety, "you may rely upon me for knowing the times and the seasons, adapted to the different stages of a work which is not to be measured by the facile conjectures of ignorant onlookers. It had been easy for me to gain a temporary effect by a mirage of baseless opinion; but it is ever the trial of the scrupulous explorer to be saluted with the impatient scorn of chatterers who attempt only the smallest achievements, being indeed equipped for no other. And it were well if all such could be admonished to discriminate judgments of which the true subject-matter lies entirely beyond their reach, from those of which the elements may be compassed by a narrow and superficial survey."

This speech was delivered with an energy and readiness quite unusual with Mr. Casanbon. It was not indeed entirely an improvisation, but had taken shape in inward colloquy, and rushed out like the round grains from a fruit when sudden geat cracks it. Dorothea was not only his wife: she was a personification of that shallow world which surrounds the ill-appreciated or desponding author. Dorothea was indignant in her turn. Had she not been repressing everything in herself except the desire to enter inter into some fellowship with her husband's chief interests?

"My judgment was a very superficial one——such as I am capable of forming," she answered, with a prompt resentment, that needed no rehearsal.

極く trivial なものが重大な結果をひきだすモメントとなるばあいがある。状況によってはそれが決定的な意味を担わせられることがある。ここにも前章で述べた心理的緊張の場面があるが、ここでは緊張をうみだすモメントがロシアの献身的な発言という、ごく自然な trivial なことである。この緊張の展開について、作者の叙述は充分に説得的である。

リドゲイト・ヒロザモンドのばあいの展開は主として外的行動と情動との間のダイナミックな相互作用において描写されていたが、ここではむしろ、カソーボンの内面のメカニカルな分析を中心に展開されている。そのわけは、主としてカソーボンとリドゲイトのパーソナリティ（個性的な反応形式）の相異にあるであらう。

人間関係において極く trivial なものが重大な意味をもつには、triviality に反応する、つまりそれを significance に転化するように充分な鋭敏な感受性が前提とされねばならない。『ミドルマーチ』の主要人物たちはすべて、それぞれのパーソナリティに応じたかかる感受性をそなえている。

(ジョージ・エリオットにおける「パーソナリティ」は、窮極的にはエゴイズムのアルトルイズムの傾向という多分に倫理的なカテゴリーにおいて統御されるところの、感受性 (feeling, sensibility) と判断力 (judgment) の統一として認識されている。従って、理想的なパーソナリティとは、積極的な「感受性」とそれを指導する透徹した「判断力」をもつアルトルイスト、ということになる。そして経験を積んで判断力が向上したばあいのドロシアはそうした理想的人物として想定されている。)

ドロシアの猷身のなしかも謙虚な協力の申し出では彼女のパーソナリティの自然な流露である。そしてそれに対するカソーボンの言動も彼のパーソナリティの自然な反応であろう。しかしそれを自然、必然とみるのは両者のパーソナリティの本質を掌握している作者と、この場面に至るまでそれぞれの内面について知らされ、あるいは行動様式を素材にそれを構成しうる機会をもっている読者のみであって、問題の二人は互に相手の行動を予想外のこと、異常なことと受けとっているのである。それはむしろ互に相手の隠された内面 'inward troubles' が見えないからである。(内面がそれ自体で重大な意味をもつこと——これはどういうことであろうか。たしかにジョージ・エリオットの偉大さは、人間の混沌たる内面の活動を注視し、いかなる外部的な行動にもまさる内面の(魂の、といってもよい)優位性を確立したことであろう。しかし彼らの 'inward troubles' があくまで彼ら個人から出て個人へと回帰する

ものであるとすれば、ぼくの意見では、なにほどのことはない。要するに私事にすぎない。彼らの悲劇はほとんど、自己を超脱してミドルマーチという「社会」の慣習的秩序に挑戦したあぐくの敗北としてあらわれるのではなく、その手前で、彼ら個人の内部に仕掛けられた運命、あるいは運命としてのパーソナリティを生きることによってひきおこされる。すなわちある種の自滅である。）

さて、「結婚」は、それがふたつのパーソナリティを最も接近させ、最も深刻な形で対決させてその本性を曝露させるという意味で、幻想を抱く存在としての人間には煉獄である。「結婚」はもはや当事者たちに傍観者の立場を許さない。「結婚」の場では、互に相手は観察等にもとづく単なる「像」として自分から離れて存在するのではなく、「像」は日常的現実のなかでたえず苛酷な検証にさらされ、時には突如決定的な変貌をうける場合もあるであろう。引用場面のカソーボンがそして同時にドロシアが経験したのもまさにそういう瞬間であったのだ。

以下、このカソーボンの心理のメカニズムをテキストに即して分析してみよう。⁽¹⁾

前段階

カソーボンおよびドロシアの真のパーソナリティは互に他から隠されたものとして前提されている。カソーボンにとってはドロシアの「像」こそドロシアである。真のパーソナリティとその「像」との間に大きな誤差があるとすればこの「像」は幻想された像、幻像とよんでよい。

第一段階（刺戟―反応）

1、刺戟 ドロシアの協力の申し出とその態度。‘a slight sob and eyes full of tears’ まで。ほとんどアクチュアルに描写されている。ドロシアのパーソナリティの自然な展開がカソーボンのそれにひとつの「刺戟」として作用する。

2、内的反応及びその理由の分析 ‘The excessive feeling manifested’ から ‘as if they were the oncoming of numbness’ まで。この「刺戟」は、カソーボンに潜在する意識 ‘muffled suggestions of consciousness’ を顕在化させることによって ‘cutting and irritating’ という情動層の「反応」をひきおこす。（これは理性のコントロールしえない刺戟—反応の必然的な因果関係である。）カソーボンに潜在する意識、すなわち彼が自己から隠蔽し、抑圧しようとしている意識とは、その意識の指摘するところを承認したばあいには彼にとって殆ど致命的といつてよい結果を招くことになるようなものである。学問に自己の一切を賭ける彼にとって学問（彼のうちにある価値層序体系の頂点にあるところの学問）そのものの存在理由が（たんに自分の下意識が折々意識の表層に浮かびあがってそれを指摘するのではなく、）信頼しうる唯一の人間とみた妻によって訊問されるのだから、彼のパーソナリティの深部を揺さぶる大問題であったのは当然である。ドロシアの献身的な行動が実は彼の「罪の意識」とでもいふべきものをあばきだす行為であった訳である。

第二段階（「像」の変形）

‘And this cruel outward accuser …’ からこの段のおわりまで。

この情動層の「反応」をバネとし、彼女の言葉という「刺戟」をひとつの重大な意味をもつ「サイン」として、ド

ロシアに関する推論と解釈がおこなわれて、その中で「bride」が「accuser」に「canary-bird」が「spy」へというふうな、ドロシア「像」は変貌するのである。

第三段階（反応の外化）

‘Mr. Casaubon's face had a quick angry flush upon it.’ 及びそれに続くカソーボンの言葉。

このような叙述の展開は一見、前章のリドゲイトとロザモンドの場面にみられた情動のアクチュアルな軌跡に似ているが、少し待ちいて分析するとその相違に気がつくであろう。すなわち、ここにあるのは、心理的緊張下の現時点における内面のアクチュアリティの描写というよりは、緊張の性質、原因の、作者のセンチヴィな知的な分析である。

ぼくらはここで、カソーボンやドロシアのあるがままの情動の現場に参加するのではなく、彼らを診察用ベッドの上のせて、ひとつの症例としてその患部の症状を分析説明していく臨床教授の声を聞いているのである。

物語は、時計の時の流れと可能ながぎり一致するのが、物語展開の最も自然な、それゆえ理想的なありかただとすると、ドロシアの献身的な発言とそれに対するカソーボンの反応の間に介在するかなり詳細な心理分析の部分は、物語の自然な流れをたちきる、いわばひとつの *stasis* であって、叙上の原則には反することになる。

われわれにはおそらく「話」とか「物語」とかに関するあるひとつのボタン——童話、昔話、お伽話、民話など、ほとんどコトバを憶え、話に興味を感じはじめていらい、さまざまな大人や他人から物語や体験談をきき、あるいは自ら話すうちにひとつのボタンをなしたものの——をもっていて、あらゆる *narrative* にたいして、そのボタンをも

つてのぞんでゐるのである。そしてその根本には、聞き手の側の、物語中の人物の行動の展開にたいする好奇心があつて、それが「話」を一方の側から支えているわけである。

したがつて、いま *stasis* と呼んだこの行動外的な心理分析の部分は、その意味では、「物語」への素朴な好奇心を遮断するわけである。しかし、そこには単に素朴な行動への好奇心とは別の、内面への好奇心があつてそれを成立させているのである。しかもそれは、いわば科学的な冷静な眼による分析的な表現であるから、読者の側に作者の知的判断力を理解しうる知的、好奇心が要求されるわけである。すなわち「心理分析」といういわば科学的な操作を経ることによってでなければ容易に事柄を信じない精神——逆にいうと心理分析のなかでは、実体が正しく把握されうるといふ信仰——が前提されているのである。

ジョージ・エリオットのなかには、素朴な意味での「話し手」と科学的な「分析家」とが共在していて、『ミドルマーチ』では、「分析家」が「話し手」を上廻っている。「話し手」としての興味より「分析家」としての興味が強いといつてよいであろう。むしろ「話」がなければ「分析」もありえない。

しかし、およそ『ミドルマーチ』は、こうした作者の知的な、分析的な叙述を無視してはその魅力の大半を見失ふことになる。

登場人物たちの行動、表情、あるいは事件の経過等、そのものにたいする興味——それらが他のものとの関係でなんらかの意味を担わされることのない——は、ディケンズとことなりジョージ・エリオットにはほとんど絶無といつてよい。彼女にとって、人間のある存在様式、人間のある行動、そして彼らの構成する事件なるもの——つまり *incident*、

process——そのものが彼女の表現への嗜好をそるということはない。行動は、それ自体の描写として読者になげだされることはなく、必ずその動機が析出され、解釈され、意味づけられるのである。

そして『ミドルマーチ』のもつ倫理性といわれるものもひとつにはこの、行動の動機への還元への操作から生ずる。そしてその動機なるものはほとんどエゴイズムにおいてその終止点をみいだすため、心理分析は、動機分析となり、さらにエゴイズム析出という形をとってあらわれるのである。(あのロシアでさえ、カソーボンの 'inward troubles' に氣附いていないとして作者の倫理的な批判をうけている点を見よ。)

ジョージ・エリオットの、このような行動それ自体の *displayed* な展開としての物語への興味ではなく、人間の「内面」にたいする関心への屈折は、外部的行動にたいする素朴な興味と信賴の喪失に起因するし、またそれは、人間の行動の形骸化(すなわち、行動が、外部にむかって開こうとする情念による起動をもたず、慣習化してしまっている)及び行動の詭弁化(たとえ情念が存在してもそれが外部へと円滑素朴に展開されずに、屈折し、sophisticate された内塞的なエゴイズムでしかない)に由来するといつてよいであらう。

ところで、行動そのものの展開にたいする興味ではなく、内面的な動機分析にたいする傾斜は、物語としての統一を支えるために窮極的には、作者の強力な知性、総合的な意識を要求してくるであらう。

また、このような作者の知的な分析的——描写的ではなく——方法、換言すれば、対象を visual に描出しようとするよりも、分析的に探求しようとする文体は、作者の一般論、概括の導入を容易にする。

たとえば——

In Mr. Casaubon's ear, Dorothea's voice gave loud emphatic iteration to those muffled suggestions of consciousness

というカソーボン個人の内面分析は、ひとつのコロンによって、*'always when such suggestions are unmistakably repeated from without.....'* という一般的叙述と連結されているが、この両者の間には表現上の位相の差がほとんど感じられない。この時制上の差を読者は特に意識しないほど、両者の文体上の差はないのである。

この一般的叙述は、カソーボンに関する個別的な分析の一般化という体裁をなしているけれども、むしろ逆に、ジョージ・エリオットの「モラリスト的」人間観察や自己反省から得たある人間論的な命題の具体的な一例としてカソーボンの内面分析があるといえなくもない。といつては誇張になるなら、カソーボンの内面をこのように分析したときそれは直ちに人間一般に妥当する真であると普遍化しうる、また普遍化しなければやまない、ある心的傾向が、ジョージ・エリオットにあるといつてよいであろう。

そしておそらく、『ミドルマーチ』の人物たちのアクチュアルな行動の描写も、作者のこうした倫理的な自己反省、人間観察からみちびきだされ、いわばある一般的な命題として、思想として、意識化され論理化されたものの、されうるものをそのすぐ背後にもっているのである。つまり、彼らの個々のアクチュアルな行動といえども、作者の人間論、人間性論に裏づけられ統御されていて、極言すれば、その範囲での、それを具体的に例証するといういみでの、行動

であるとみてもいいのではないかとおもう。

さて、内面的な動機分析にたいするはげしい興味が、「物語」としての統一を支えるためには作者の強力な知性、総合的な意識を要求すると前に述べたが、ある意味で恐るべきこの意識性は、同時に危険をはらんでいるのは明瞭である。なぜなら、物語の展開にあたって、作者の関心を集中しうる一般的、抽象的命題を例証しうるがごとき行動、情況のみが撰択されるし、いわばその撰択に洩れた「生活のあまり」の部分のはたす機能、撰択されたもののリアリティを補強する機能がほとんど無視されてしまうからである。

たとえば、ドロシアとカソーボンとの結婚の過程が『ミドルマーチ』の大きな主題のひとつであるのに、結婚式の描写は『ミドルマーチ』の世界に全然入りこむ余地がないのである。それはリドゲイトとロザモンドに関しても同じである。すなわち、「結婚式」の模様を描写するということなどは、ジョージ・エリオットの興味の外にあるのだ。

また、二人の結婚に先立つ一〇章でブルックス氏招待の婚約の披露のバーティの描写があるが、それもバーティそのものの描写というよりは、そこにやがて登場するミドルマーチの主要人物たちを紹介するための場として利用されてしまっている。したがって、バーティそのものの雰囲気そこから浮かびあがってはこないのである。

『ミドルマーチ』の世界の一種の息苦しさ、狭さは、内面への集中的関心とか、舞台の制約とか、緊密な人間関係とかに由るといふよりも、むしろ、叙上のような、たとえば結婚式やバーティをそれ自体のために描写することを拒否するがごとき、作者の人間論的思想化への集中的興味にあるといつてよいであろう。もっともそれは、単なる「教義」の提示でもなく、また教義の解説のためのお話しでもなく、ジョージ・エリオットの人間観察、自己反省等、自

分のきびしい「経験」に発するものであるから、上述のごときおそるべき人間性の一特質を鋭く開示することができ
る。しかしやはり、こうした具体的描写をほとんど拒否して、一般的命題、あるいはほとんど直ちに一般化しうる叙
述を優位せしめることは、それが随所に物語の「流れ」を遮断することによって、物語としての生命力を害う危険性
例えはをはらむことはいなめないであらう。⁽²⁾

たとえば次の一文を検討してみよう。

Here, towards this particular point of the compass, Mr. Casaubon had a sensitiveness to match Do-
rothea's, and an equal quickness to imagine more than the fact.

これはカソーボンの内部におけるドロシア像の変化——Canary-bird から spy への——を起さしめた動因、sensi-
tiveness の指摘である。

ここでまず注意すべきことは、sensitiveness（病的に過敏な sensibility）、「事実以上を想像してしまう」傾向では、
ドロシアもカソーボンも同断であるという指摘である。

およそ対照的なふたつのパーソナリティから共通項として sensitiveness を抽きだし、その抽象によって二人を同
一の側面において捉えるという characterization の傾向。それはどこに由来するのか。

少くとも、個々の人物、および彼らの個々のアクチュアルな行動（外的であれ内面的であれ）のなかに、より普遍

的なるものを抽象的に認識しようという傾向、と同時に、ある普遍的、抽象的な概念を介して個別を認識しようという傾向のひとつのあらわれとみななければならないであろう。さらに、パーソナリティの把握において、したがって人間の価値評価において、ジョージ・エリオットのばあい、*sensibility* がひとつの重要な指標になる、というひとつのあらわれでもあろう。

そして *sensibility* は、*sympathy*、思いやり、理解、連帯感という、人間関係の完成において必須の心性の大前提として不可欠であって、すべての登場人物はこの *sensibility* という側面からの照明をあてられ、それらの個々の質が曝露されるのである。たとえばここでカソーボン、過度の *sensibility*、すなわち *sensitiveness* という点においてはドロシアと共通であるが、その感度が敏感なのは彼の自尊心にたいしてであって、ドロシアのカソーボンを理想化するように働く敏感さとは相違するわけである。

ジョージ・エリオットは *sensibility* 人間評価の重要な指標とみるわけであるが、それが知的判断力によって統御されないときには「幻想」をうむという、*sensibility* 自体には価値の積極面と消極面があることはいうまでもない。いずれにせよ *sensibility* というものの異常な関心は次の一文に明瞭にあらわれている。

The element of tragedy which lies in the very fact of frequency, has not yet wrought itself into the coarse emotion; and perhaps our frames could hardly bear much of it. If we had a keen vision and feeling of all ordinary human life, it would be like hearing the grass grow and the squirrels

heart beat, and we should die of that roar which lies on the other side of silence. As it is, the quietest of us walk about well wadded with stupidity.

日常的些事の中にも敏感な sensibility なら悲劇の要因を認めるはずだ、幸か不幸かわれわれはそうした sensibility をもたないから結構呑気にやっていける、しかしジョージ・エリオットによれば、それが 'stupidity' であることには変りはないのである。

これは日常性のうちで摩滅した sensibility の持主にたいする痛烈な弾劾であろう。こう書くジョージ・エリオットが、カソーボンやドロシアをうわまる sensitiveness の持主であったことはこゝから明らかであるが、それ以上に重要なことは、そうしたいわば詩的昂揚 (poetic trance) においてあらわれる感受性の極限状態——草ののびる音、ひばりの心臓の鼓動まできこえるという——は、日常性 'ordinary human life' とはいいいれないものだという認識あるいは諦念があるということだ。そしてドロシアと作者ジョージ・エリオットを区別するのはこの「認識」なのである。いづれにせよ、こゝに示されているような、ひとつの一般論として定式化されるがごとき人間の行動やあり方にたいするアプローチ——したがって小説の叙述方法——が『ミドルマーチ』を貫いており、それがいわゆる「知的」文体、「知的」な作家という印象を与えるのである。

(1) 日本語訳を巻末にそえた。

(2) Cf. Bethell: *Literary Criticism and English Tradition*, VI. Narrative

あとがき

『ミドルマーチ』を論するには以上ではまだ完全ではない。たとえば同じテキストⅣを用いて「像」(幻想)と実体のテーマを集中的に分析しなければならないであろう。また、sensitivity が自己へかゝわるときは conscience という相貌であらわれ、他者へかゝわるときは sympathy から fellowship へと展開するという点でジョージ・エリオットの「倫理」の基本的問題も当然まともな考察を必要とするであろう。さらに文体における四つの叙述層の問題など論すべきことはまだあるが、紙数もつきたのでこゝで一応区切りをつけておく。

参考文献(註の順)

- Arnold Kettle: *An Introduction to the English Novel, vol. I*
F. R. Leavis: *The Great Tradition*
Basil Willey: *Nineteenth Century Studies*
Joan Bennett: *George Eliot: her Mind and her Art*
Lawrence & Elizabeth Hanson: *Marian Evans & George Eliot*
Barbara Hardy: *The Novels of George Eliot*
Richard Stang ed.: *Discussions of George Eliot*
S. L. Bethell: *Literary Criticism and English Tradition*
Haight ed.: *The George Eliot Letters*

テキストⅠ 試訳

ヴィンシー嬢はひとりであった。リドゲイトが入って来た時彼女の頬はひどく紅潮した。つられて彼はなにかどぎまぎした。からかうようなことは言わずにすぐに用件をきりだし、ほとんど礼儀正しく彼女の父への伝言を頼んだ。ロザモンドははじめ、以前の幸福がもどってきたと錯覚していたのでこのリドゲイトの態度には気分を害した。頬のあからみは消えてしまった。余計なこととはなにひとつ言わずただ冷淡に、承知しましたと言った。一寸した鎖編みだが手にしていたおかげでリドゲイトの顎から上は見えないですんだのである。失敗というものはどれも、その発端だけで全体の半分に相当するということはたしかだ。リドゲイトは黙って鞭をいじりながらも二分ばかり坐っていたが、立って出て行こうとした。ロザモンドは、屈辱感とそれを表情にだしたくないという気持、この二つの感情の葛藤で心が昂っていたので、ぎょっとしたように鎖編みをとり落し、機械仕掛けのように立ち上った。即座にリドゲイトが屈んでこれを拾った。身をおこすとあの美しい細い顎の上の可愛い小さな顔が彼のすぐそばにあった。それは、自足した優雅さにいとも完璧に統御されて向きを変えるのをすでに幾度となく見てきたあの顎である。しかしま眼をあげてみると、ある絶望的な震えが映った。それは全く新鮮な感動を彼に与えた。彼は訊問するように眼を輝かせて彼女を見た。この瞬間彼女は、まるで五歳の童女にかえたかのように自然であった。涙がこみあげてくるのを感じた。青い花の上の雪のようにおくまにするか、頬をつたっておちるにまかせるか、ほかにどうしようもなかったのである。心が自然にかえるこの一瞬こそ結晶化の作用をする羽毛の一触であった。それは恋のあそびを掻きふってまことの恋に転化させた。露をおびた忘れな草を見つめているこの男は、大望を抱いてはいたが心のやさしい性急な男であることを忘れないでもらいたい。あの鎖をどこにやったかわからなかった。ある想念が彼の心の奥処をおののかせた。それはあの密閉されていな

い墓、ごく軽い力を加えただけでも穴のあく土、に埋もれている情熱的な恋の力をよびおこすのに奇蹟的な効果を及ぼす想念であった。彼の言葉は全く唐突でどこちなかったけれど、口調のせいで心をこめた熱烈な告白のようにひびいた。

「どうなさったんです。なにを悩んでいるんです。どうか話して下さい。」

こんな調子で話しかけられるのはロザモンドにはじめてであった。彼女にその言葉は聞きとれなかったとわたしは思う。しかしリドゲイトに眼を向けた。すると涙が頬をしたたりおちた。この沈黙にまさる完璧な返答はありえなかったらう。リドゲイトは突然、この若くて美しい女の喜びも悲しみもおれ次第できまると確信すると、湧きでてる優しさに圧倒されてなにもかも忘れ、ほんとに彼女の身体に腕をまわしてやさしくいたわりながら胸に抱きしめ——彼は弱き者、悩めるものにしたいてはやさしくふるまうことにはなれていたのである——そして二粒の大きな涙に接吻した。理解に達する方法としてはこれは奇妙な方法ではあったけれど近道ではあった。ロザモンドは別に怒りもせず、おもはゆげにただ一寸後ずさりした。リドゲイトも今や彼女の傍にすわって前よりもちゃんとしゃべることができた。ロザモンドも二三告白しなければならなかった。すると彼の方は、感情に駆られて感謝とやさしさをこめた言葉をふんだんに吐きだすのであった。三十分たって彼女の家を去ったとき、彼は婚約者になっていた。魂はもはや自分のものではなく、われとわが身を縛りつけた相手の女のものであった。

テキストIV 試訳

「それからノートを全部」とドロシアはいった。彼女の胸はこの問題についてすでにひそかに燃えていた。そこでいま口に出して言わずにはいられなかったのだ。「あの何列にも並んだ本も——いつも話してらしたことをおはじめになりませんか? ——どの部分をお使いになるかお決めになりませんか? あなたの該博な知識が世のためになるような本をお書きははじめにしたら? ——おっしゃる言葉通りに筆記したり、筆写したり抜き書きしたりいたしますわ。わたくしってほかにはなんのお役に

も立てませんもの。」ドロシアは、なんとも説明しがたい女らしい態度でこう言い終えた時、眼に涙があふれ、すすりなきがまじっていた。

感情の披瀝過剰というのなら、ただカソーボン氏に煩さがられるだけですんだらう。彼女がはつきりと口に出して言いはいなかったことだが、カソーボン氏にとってドロシアの言葉が痛烈で腹立たしい種類のものではなか、それにはまた別の理由があったのである。彼が彼女の肉面的な問題に盲目だったように彼女の方でも彼の肉面的問題には全く盲目であった。われわれの憐憫に値するあの隠れた夫の心の葛藤に彼女はまだ気付いていなかった。彼の心臓の鼓動に辛抱強く耳を傾けたことはまだなく、自分の心臓がはげしく打ちつづけていることしか感じていなかった。思い過ごし、病的な過敏さのうむ幻想として説明しうるようなあの、意識がふくみ声で告げる暗示にすぎないものを、ドロシアの声は、増幅して再現してみせたわけであった。このような暗示が外部からの確に反復されるときはいつでも、残忍不当なものとしてこれに抵抗するものだ。われわれは屈辱的な告白を全面的にうけいれるだけでも腹が立つ、ましてや、混沌たる心の嚙きにすぎぬもの——われわれはそれを病的と称して、それに対しては麻痺の接近に抗らうように抗らおうとする——を傍観者の口からきびしく一語一語明瞭に発音されるのを聞いてはなおさらであらう。あまつさえこの残忍な外部からの告発者は、いま妻の姿でそこにいる——いや、花嫁の姿でそこにいる、そして夥しい走り書やノートを、気品の高いカナリヤの、批判をまじえぬ畏敬の念をもってながめるのではなくして、不吉な推理力をもつてすべてを見張るスパイとして存在しているような気がした。カソーボン氏も、磁石の特にこの方向にだけはドロシアに匹敵する敏感さをそなえていたし、ドロシア同様に、事実を超えた想像をはたらかす鋭敏さをもっていた。正しいものを崇拜する力が彼女にあることを以前は結構なこととみていたのだが、ひょっとしたらこの能力は出しゃばりに代り、この崇拜は最も腹立たしい批評に——あの多くの立派な結果だけをぼんやり見てそれに達するにはどれほど苦勞するか少しも考えない批評に——代るのではないかと思うと突然おそろしくなった。

ドロシアがカソーボン氏を知って以来はじめて彼の顔にさっと憤りの赤らみがはしった。「ねえお前」、たしなみの手綱で怒りを抑えつつ言った、「時期とか季節とかはわたしにまかしておきなさい。仕事にはいろんな段階に応じた時期があるのだし、仕事というものは無学の見物人連中が軽々しい推測をやってみるところで判断できるものではない。蟹気楼さながら根拠のない意見で一時的な結果をだそうとすればとつくの昔にやってのけられた。しかし、ちっぽけな業績をあげるのに汲々としてほかにはなんの準備もないおしゃべり共の、我慢のならぬ軽蔑を浴びるのも良心的探求者のいつもかわらぬ試練なのだ。彼らなどには全く手にとどかない真の問題を判断するのと、狹隘皮相な調査で理解しうるような基本を判断するのとは、判断は判断でもちがうんだということを彼らに教えてやれるといいのだが。」

いつものカソーボン氏に似ずちからのこもった流暢な話しぶりであった。その時突嗟にでた言葉では全くなく、内的対話のなかですでに形をなしていてちょうど穀物を急に熟するとはじけて中から穀粒がとびだすように、とびだしたのであった。ドロシアは妻であるのみならず、不評のあるいは失意の著者をとりまく浅薄な世間の化身でもあったのだ。

こんどはドロシアの方がむっときた。自分は夫の主要関心事を理解したいというねがいはかはすべじっとおさえてきたのではなかったか。

「わたくしの判断はとても浅はかでしたわ——わたくしにできるような判断なんですものね。」彼女はついむっときてこういったが、これには別に下稽古の必要はなかった。

(Sept. 30 1963.)

(附記 原稿提出後、海老池教授から拝借した David Daiches : *George Eliot : Middlemarch* (Edward Arnold Ltd, London, 1963) は、緻密な作品論で教えられるところ多かったが、驚いたことに、本論のテキストの部分は「偉大な場面」としてやはり長々と引用されている。)